

Title	日本のキリスト教信者の死者儀礼への対応：三島市と静岡市の事例を通して
Sub Title	The response of Christian on death rituals in Japan : case studies in Mishima city and Shizuoka city
Author	金, 美連(Kim, Miyeon)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.257- 294
JaLC DOI	
Abstract	This paper examines the attitudes and thoughts of Japanese Protestants to the Buddhist altar, burning incense and graveyard. This paper considers the Buddhist altar as a symbol of ancestor worship, burning incense as a prayer for the souls of the dead, and graveyard as a place of ultimate family belonging for the living. As rites have not only religious but also cultural influences, it is difficult for Japanese Christians to be disassociated. Therefore, Japanese Protestants react diversely to death rituals and connections between the traditional culture and Christianity are found. The subjects of this study are Protestants over the age of fifty who are members of four churches in Mishima city and two churches in Shizuoka city and have been influenced by both traditional culture and Christianity culture. This paper reveals three things. Firstly, there are many cases where Protestants in Mishima city and Shizuoka city have alter-natives to the Buddhist altar such as pictures of the dead, flowers and crosses. Secondly, they undergo a mental conflict deciding whether burning incense is a prayer for the souls of the dead or just a folk tradition. Thirdly, they tend to believe that the grave of family member is much more important than churchyard.
Notes	第2部 民俗宗教から観光研究まで 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0260

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

日本のキリスト教信者の
死者儀礼への対応
——三島市と静岡市の事例を通して——

— 金 美 連* —

**The Response of Christian on Death Rituals in Japan;
Case Studies in Mishima City and Shizuoka City**

Miyeon Kim

This paper examines the attitudes and thoughts of Japanese Protestants to the Buddhist altar, burning incense and graveyard. This paper considers the Buddhist altar as a symbol of ancestor worship, burning incense as a prayer for the souls of the dead, and graveyard as a place of ultimate family belonging for the living.

As rites have not only religious but also cultural influences, it is difficult for Japanese Christians to be disassociated. Therefore, Japanese Protestants react diversely to death rituals and connections between the traditional culture and Christianity are found.

The subjects of this study are Protestants over the age of fifty who are members of four churches in Mishima city and two churches in Shizuoka city and have been influenced by both traditional culture and Christianity culture.

This paper reveals three things. Firstly, there are many cases where Protestants in Mishima city and Shizuoka city have alternatives to the Buddhist altar such as pictures of the dead,

* 日本大学非常勤講師

flowers and crosses. Secondly, they undergo a mental conflict deciding whether burning incense is a prayer for the souls of the dead or just a folk tradition. Thirdly, they tend to believe that the grave of family member is much more important than churchyard.

Key words: Christianity culture, Death rituals, Buddhist altar, Incense, Graveyard

はじめに

アメリカの人類学者エドワード・T・ホールは、『沈黙のことば』で「文化とは単なる習慣以上のものであり、習慣の場合とはちがって、着物の様に自由にとりかえることのできるものではない。……しかも文化による決定的な影響のほとんどは、人間の意識の外にあり、個人がどれほど意識的に操作しようとしても、できない相談なのである。」[ホール, 1967: 43-45] と述べた。民衆の中に深く根を下ろした文化は簡単に変わることなく、民衆の意識下で作用し続ける。

文化の根強い性質はキリスト教の受容においても例外なく表れる。キリスト教は日本の伝統文化や社会に様々な変化をもたらしながら受容されたが、一方では浸透するキリスト教側も在来文化による影響を受けなければならなかった。とりわけ民衆の宗教的支柱として働いてきた死者儀礼は、キリスト教との接触に際していっそう複雑かつ多様な変容の過程を辿っているといえよう。なぜなら、死者儀礼は単なる儀礼以上の、その民族の靈魂観や、他界観、神観念、救済観などを象徴する宗教体系を有しているため、外来宗教の死者儀礼を受け入れることは決して易しくないからである。日本では「葬式仏教」と言われるほど死者儀礼は仏教と結びついており、キリスト教信者にとって死者儀礼への対応は厳しい問題である。そのため、キリスト教信者の死者儀礼、特に日本の死者儀礼の象徴的なものといえる仏壇や焼香、墓への対応は様々な様相を呈している。

本稿では、静岡県三島市と静岡市におけるキリスト教信者が仏壇や、焼香、墓にどう対応し、どんな思いを持っているかについて探ることにする。ここで、仏壇は祖先信仰の拠点として、焼香は死者供養として、墓は自己の集団帰属の根拠としての意味合いがあると考えられる。これらの意味合いを踏まえながら、キリスト教信者の在来文化との関わり合いを考察したいと考える。

調査は三島市では4カ所のプロテスタント教会、静岡市では2カ所のプロテスタント教会で、主に年配のキリスト教信者を対象に聞き取り調査を行った。年配のキリスト教信者を調査対象にした理由は、二重の文化（伝統文化とキリスト教文化）が共存しているため、伝統文化とキリスト教文化の関わり合いを浮き彫りにするのによりふさわしいと思われたからである。考察方法は、三島市と静岡市の比較研究ではなく、事例を広げるという意味で三島市と静岡市の事例をまとめて考察する。

I 三島市と静岡市におけるキリスト教の伝来と現況

最初に、三島市におけるキリスト教の伝来や現況について記したい。

三島市は人口112,488人（2007年4月30日現在）で、古来当地方における宗教的中心地として古い歴史の面影をとどめている。奈良・平安時代の三島は、国府所在地であったことから国分寺・国分尼寺が建立され、この地方の政治、文化、交通の中心地であったと見られる。その後は鎌倉幕府を開いた源頼朝が挙兵（1180）に当たり祈願したことで有名である三島明神（現三嶋大社）の鎮座の地として栄えた。三島明神は武士の崇敬厚く、足利尊氏をはじめ、多くの武士が寄進している〔総務部広報公聴課、2003〕。三島市は戦災の被害も受けなかったため、現在でも古い街並みが比較的保存されており、伝統文化の残存度が高いといえる。

1994年現在、三島市には事代主命、大山祇命を祀る三嶋大社をはじめ、56社の神社がある。仏教寺院は63カ寺で、宗派別には日蓮宗が16

カ寺，臨済宗が 15 カ寺，曹洞宗と浄土宗が各 10 カ寺である〔静岡県総務部学事課 1994: 19〕。

三島にプロテスタントが初めて伝えられたのは，1875 年（明治 8）であり，新教渡来後わずか 15 年，横浜に日本最初の新教教会が設立されて 3 年目であって，新教史においても極めて初期に当たる〔三島市誌編纂委員会 1959: 595〕。明治 8 年ジェームズ・バラ博士は青年伝道者伊藤藤吉とともに三嶋大社の前で路傍説教をしたが，まだ三嶋大社の前にはキリシタン禁制の高札が掲げられており，群衆の反感も大きかったため，大混乱が起こったこともあった。しかし，徐々に信徒数は増加していき，1883 年（明治 16）には三島教会が正式に設立された〔長倉 1998: 14〕。そして旧家の小出・花島両家が入信し，花島家の花島兵右衛門は，1888 年（明治 21）にキリスト教主義女学校である薔花女学校を創設した。しかし，日清戦役当時に至って維持困難に陥り廃校となった。

戦時中日本のプロテスタント教会は日本基督教団として大同団結しようとの運動が起こったので，三島教会もこの教団に加入し，日本基督教団三島教会と称するようになった。戦時中三島西キリスト教会は政府から強い弾圧を受けたが，終戦後自由な伝道活動が再開された。

2007 年現在，三島市には 8 カ所のプロテスタント教会と 1 カ所のカトリック教会がある。次の表 1 は三島市の教会と教会員人数を示したものである。信徒数が 100 人を超える教会は三島教会 1 カ所しかなく，ほとんどの場合数十名の小規模の教会である。

次に，静岡市におけるキリスト教の伝来と現況について見てみたい。

静岡市は静岡県の県庁所在地として県の中部に位置しており，人口は 710,933 人（2007 年 4 月 30 日現在）である。静岡には縄文遺跡や，弥生時代後期の住居などで名高い登呂遺跡などが残っている。奈良時代には静岡に駿河国府が置かれ，国分寺が建立された。鎌倉時代以降は東海道の宿駅，府中宿として発展した〔若林 1988: 339〕。戦国時代には今川氏・

表1 三島市の教会と信徒数

教会名	信徒数			教 団
	男	女	計	
三島キリスト教会	7	16	23	単立
三島高台キリスト教会*	18	34	52	日本ホーリネス教団
加茂川キリスト教会	38	59	97	東洋福音教団
三島教会*	28	78	106	日本基督教団
三島西キリスト教会*	7	12	19	ウェスレアン・ホーリネス教団
三島バプテスト教会	19	30	49	日本バプテスト連盟
三島めぐみチャーチ*	24	39	63	日本同盟基督教団
三島聖書バプテスト教会	3	3	6	単立
三島カトリック教会			400	カトリック

注：信徒数は2004年4月現在。

*：調査教会

武田氏と領主が変転したが、1582年（天正10）、徳川家康がここを領して駿府城を築き、現在の静岡市の基盤をつくった。

しかし、明治維新後、徳川家は政権の担い手からわずか駿河府中（後の静岡）の70万石の一大名に没落し、主家徳川家に従っていた旧幕臣は住み慣れた江戸から駿河・遠江・三河の各地へと追い立てられるようになった。このように政治的栄達の道を絶たれ、経済的・社会的にも窮乏・転落を余儀なくされた旧幕臣の中から維新後キリスト教に入信した者が多く出た。

1868年（明治元）、静岡では旧幕府の優秀な学者を集め、藩士の子弟を教育するために「静岡学問所」を開設した。この静岡学問所にアメリカ人エドワード・ワーレン・クラーク（1849～1907）が、1871年（明治4）12月に教師として赴任したのである。彼は英語や化学、物理、数学などを教え、さらに雇用の際の約束により日曜日には自宅で希望者に対してバ

イブル・クラスを開くことが認められた。これが静岡におけるキリスト教の最初の種を蒔くことになる [沼津市明治資料館 1997: 3]。

その後、1874 年（明治 7）4 月、カナダのウェスレアン・メソジスト教会から派遣された宣教師マクドナルド（1836～1905）が静岡に赴任した。マクドナルドは「賤機舎」（静岡学問所の後の名前）で英語や科学を教えるとともに、日曜日にはキリスト教の説教を行い、同年 9 月 27 日、生徒の中から最初の受洗者 11 名が生まれた。これが静岡市の最初の教会である静岡教会の始まりである [沼津市明治資料館 1997: 5]。

しかし、戦時中は日本基督教団への加入を余儀なくされ、教会の歩みも曲折を免れなかった。また静岡市の大半が焼けた 1945 年（昭和 20）の戦災によって、静岡教会も焼失し崩壊してしまった [静岡教会創立百周年記念実行委員会 1974: 18]。しかし、戦後次第に教勢の進展を見るようになる。次の表 2 を見ると分かるように、1994 年に静岡市には 19 カ所のキリスト教教会が宗教法人に登録されている。しかし 2007 年現在、実際の教会数は 30 カ所ぐらいあるといわれており、その中でカトリック教会は 2 カ所であり、残りはプロテスタント教会である。教会の規模は三島市より大きく、筆者が調査した静岡教会は教会員が 200 人ほどであり、静岡梅屋町キリスト教会は 120 人ほどである。

神社は平安時代から駿府の総社として鎮座していた浅間神社をはじめ、

表 2 静岡市の宗教法人数

宗教別	法人数
神社	240
仏教寺院	222
キリスト教教会	19
その他	88

『静岡県宗教法人名簿』静岡県総務部学事課 1994, 83 頁より作成。

240 社がある。仏教寺院は 222 カ寺で、この中では曹洞宗がもっとも多く、113 カ寺がある。その次は臨済宗が 41 カ寺、日蓮宗が 16 カ寺、浄土宗が 16 カ寺である〔静岡県総務部学事課 1994: 83〕。静岡県には禅宗寺院が多いが、中でも曹洞宗は戦国大名の今川氏が保護したことで急速に寺院数を増やしていった〔小和田編 2000: 71〕。

II 事 例

ここでは、三島市と静岡市におけるキリスト教信者の仏壇や、焼香、墓の問題への対応に関する事例をいくつか紹介する。

1. 三島市の事例

〈事例 1 A 氏（女性、61 歳、信仰歴約 12 年）〉

A 氏一人が家の中でキリスト教を信仰しており、夫の母親も同居しているので、家には仏壇（写真 1）がある。この仏壇には 29 年前に亡くなった夫の父親と他の二人の親戚の位牌が納まっており、夫の母親が毎日線香をたてたり、水を変えたりしている。また時々花や果物を供える。離

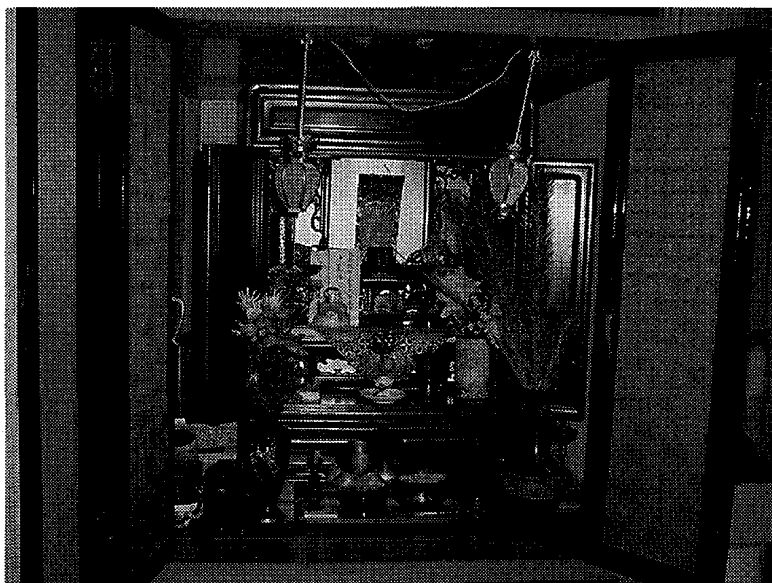


写真 1 A 氏の家にある仏壇

れている夫の兄弟達が A 氏の家を訪れると、先ず仏壇を拝む。そしてお土産などをもらったりすると、母親が先ず仏壇に供える。

A 氏の家は分家なので、本家がある千葉から墓石を運んできて、所属教会の共同墓地の隣に家族の墓を造った。A 氏の夫の父親はキリスト教信者ではなかったが、教会の共同墓地の近くに家の墓地があるため、教会の墓前礼拝（教会墓地で故人を記念して行う礼拝）には一緒に参加している。それ以外には家族で盆や彼岸、暮れ、命日などに墓参りをしている。

〈事例 2 B 氏（女性、84 歳、信仰歴約 50 年）〉

病気で若い時亡くなった B 氏の弟はキリスト教信者であったが、亡くなる時死を恐れなかった。それに感銘を受けた B 氏は、50 年ほど前に洗礼を受け、キリスト教信者となった。B 氏の弟は教会でキリスト教式葬式を行ったが、東京の日蓮宗寺院にある家の墓に埋葬しようとしたら、寺が寺院墓地への埋葬を拒否し、仏式でもう一度葬式を行わなければならなかった。

東京の家の墓には亡くなった弟と父、父の前の妻が埋葬されていたが、数年前に彼ら 3 人の遺骨を教会の納骨堂に改葬した。改葬した理由は、B 氏は早く離婚して一人暮らしをしており、子供がいないので、寺の墓には入れてもらえないこと、永代供養はあまりにも高く、現実的に不可能であること、東京は遠くて墓参りに行くのが大変であることなどであった。墓地移転には多くの手続きを要したが、教会の納骨堂は安いし、毎年墓前礼拝を行っているので安心できるという。

B 氏の家には亡くなった 3 人を供養する仏壇があったが、キリスト教信者になってから 10 年後、仏壇がほしいという人にあげた。位牌は捨てたり、焼却したりすることはできないので、家にしまってあるという。

しかし、祖霊を供養する B 氏の行為や意識はほとんど変わっていなかった。前に仏壇を置いてあったところに、亡くなった家族の写真が飾ら

れており、その前にはお茶やご飯が供えられていた。それを見た筆者はB氏に今もそこに供物を供えるかと聞いた。すると今でも毎朝お茶とご飯を供えているし、もらったお土産もまずそこに供えると答えた。また何か困ったことがあれば故人に向かって助けを求めるし、日頃のことについても心の中で語りかけると述べた。亡くなった家族が今もなお生きているように感じるという。

仏式の葬式に参加した時は、焼香や合掌、死者の冥福を祈ることなどすべて行っている。また清めの塩も家に入る前に自分の体にふりかける。

〈事例3 C氏（女性、75歳、信仰歴約50年）〉

小さい頃、教会の日曜学校に通ったことがあるが、本格的には終戦後から教会に通い、現在は教会の役員をしている。夫の家はクリスチャンホームだったので、夫の葬儀はキリスト教式に行った。夫の父は末子だったので、三島市の市営墓地を購入し、家の墓を新たに造った。そこに夫の両親と夫の姉、そして夫が埋葬されている。先祖代々の墓は本家が守っており、C氏はその墓には行かないが、葬式には呼ばれたら行く。仏式や神式の葬式には参列しても抵抗感がなく、それらの形式に従っている。

家には夫の写真が飾られており、困ったことなどがあれば写真を見ながら夫に語りかける。また盆や、彼岸、暮れには墓参りをしてそこでも故人に日常の出来事を報告したり、お願いをしたりするが、そうしている内に次第にキリスト教の神への祈りに変わっていくという。

一方、C氏の実家は仏教を熱心に信仰した家であり、20年ほど前に亡くなったC氏の父親の葬式は仏式で行った。C氏の実家の墓は先祖代々の墓であり、現在は一人娘であるC氏しか墓の世話をする人がいないので、C氏が寺にお金を納めたり、墓の掃除をしたりする。C氏は自分が死んだら父親の墓を永代供養にするつもりであるといった。法事はきちんと行っており、現在まで十七回忌を済ませた。実家の墓には夫の家の墓と同

じく、花をもって盆や、彼岸、暮れに行って墓掃除をしたり、故人に報告をしたりする。夫の家族と実家の家族とは、宗教は違うが、墓参りに行くC氏の気持ちは同じであるという。

〈事例4 D氏（男性，71歳，信仰歴約50年）〉

D氏の父親は婿養子だったので、中伊豆にある母親の先祖代々の墓に葬られた。D氏の家は檀家になっており、両親の法事は寺で行う。D氏は法事に行き焼香はするが、死者は拝まない。またD氏は長男であるが、仏壇は中伊豆に住んでいる妹の家に置いてあり、妹が毎朝両親の供養をしている。D氏の家には両親の写真など思い出の物を置いている。そして度々両親に祈願する。日頃の事について両親に語りかけたり、困ったことがあれば助けを求めたりする。墓参りは主に彼岸に行っている。

仏式の葬式に参加する際は焼香のことで大変悩むと述べた。公務員であるし、回りにクリスチャンであることをあまり言わなかったのも、とりあえず3度の焼香のうち、1度だけは必ずやる。残りの2度はできるだけ避ける。また合掌して死者を拝むのではなく、キリスト教の神に死者を赦して天国へ導いてくださるように祈りをする。

D氏は将来先祖代々の墓に入るつもりはないといった。両親が淋しがるかも知れないが、家族の墓を造るか、あるいは教会墓地を購入するかにするという。

〈事例5 E氏（女性，64歳，信仰歴約35年）〉

E氏の母親はキリスト教信者であったが、父親は米屋をしていたので商売のためにえびすなどを拝んでいた。父親はほとんどキリスト教を信仰していなかったが、両親ともキリスト教式葬儀を行った。そしてE氏の父親は長男ではなかったので、市営の共同墓地に家の墓を新たに造り、そこに両親を埋葬した。母親の場合は母親が生前分骨を願っていたので、家の

墓と教会の墓に分骨した。

一方、キリスト教信者でないE氏の夫は長男であり、浜松にある先祖代々の墓を守っている。夫の家は檀家に入っており、毎年寺に寄付している。そして家には仏壇があり、夫が毎朝線香をたて、お茶をあげている。クリスチャンになる前はE氏が仏壇の世話をしていたが、キリスト教を信仰してから仏壇の世話をしなくなった。墓参りにもE氏は行かず、E氏の夫と夫の兄弟たちが盆などに線香や花を持って行く。E氏は仏壇や墓の前で故人に語りかけたり、お願いをしたりすることはしない。祈りは専らキリスト教の神にするだけだという。

E氏は自分も母親と同じく教会墓地と家の墓への分骨を希望していると語った。

〈事例6 F氏（女性、62歳、信仰歴約9年）〉

F氏の家には仏壇があり、F氏の両親の位牌が納まっていた。しかし普段それほど世話をしなかったので、F氏は仏壇を祀る方法があまり分からなかった。それで仏壇の世話が次第に重荷になっていった。とうとう母親の三回忌の後には仏壇の世話をする気がすっかりなくなってしまった。その頃、クリスチャンとなり、教会に通い始めてから3カ月後には仏壇を閉めた。そしてクリスチャンになってからは寺にも行けなくなり、家の墓の移転を決心するようになった。教会に通ってから2年後、F氏の両親と死産した次男の遺骨を教会墓地に入れてもらい、仏壇も処分した。ただし、彼らはキリスト教信者ではなかったので、教会墓地の石碑に名前を刻んでもらうことはできなかった。F氏は教会の墓前礼拝ごとに、牧師や信者たちと一緒に墓へ行って礼拝を行う。個人的な墓参りはほとんどしない。

キリスト教信者になってから2年後からは、仏式の葬式に出席しても焼香をせず、清めの塩も捨てている。

〈事例7 G氏（女性，78歳，信仰歴約45年）〉

G氏の家には亡くなった長男を供養する仏壇や、稻荷を祀る神棚があったが、クリスチャンになってから数年後、仏壇は寺に、神棚は神社に返した。長男の位牌はずっと持っていたが、2～3年前に牧師に言われ、父親からもらって持っていた仏像と一緒に焼却した。G氏の父親はキリスト教信者であったが、それほど信仰心が厚くなかったため、友達から預かった仏像を家の宝物にしていた。そしてG氏が結婚した際にプレゼントとしてくれたのである。

G氏は夫の父親の法事に夫と一緒に参加している。クリスチャンになったばかりの頃は夫にだけ前に出てもらい焼香をしてもらったが、そのようなことで夫に怒られ、それからはG氏も焼香の順番が来ると祭壇の前に立つようになった。しかし焼香や合掌はせず、ただ黙祷をする。親戚の葬式に参加する時も、葬式の前にクリスチャンであることを伝え、焼香をしないことについて了解をもらう。

G氏の夫は次男なので、墓地への執着はあまりないという。それで数年前に所属している教会の共同墓地を購入することができた。

〈事例8 H氏（女性，66歳，信仰歴約66年）〉

クリスチャンであったH氏の夫の母親は13年ほど前に亡くなった。しかし夫の家は檀那寺との関係が深く、仏式で葬儀を行った。その際H氏は焼香や死者への拝礼をしなかったので、夫の兄に文句を言われた。去年、夫の母親の十三回忌があった。日曜礼拝と重なり迷ったが、夫の兄の気持ちを考えて法事に参加した。しかし、死者のための祈りではなく、キリスト教信者でない夫の兄のために祈りをした。

H氏は数年前に教会墓地を購入したが、そこにはクリスチャンであった実家の両親が埋葬されている。H氏の家には夫の両親と実家の両親の写真が飾られている。そして困ったことがあれば、写真を見ながらキリス

ト教信者であった実家の両親にキリスト教の神にとりなしのお願いをする。日頃のことについても語りかけたりする。

〈事例9 I氏（女性，54歳，信仰歴約20年）〉

I氏の家には仏壇や神棚があったが、キリスト教信者になってから、位牌は他の親戚にあげ、仏壇と神棚は取り外して処分した。そしてI氏は夫の父親の法事にも行かなかったりして、そのことで夫に怒られたことがある。

夫の父親はI氏が結婚する前に亡くなり、寺が管理する先祖代々の墓に埋葬された。I氏より2年後にクリスチャンとなったI氏の夫は法事に参加はするが、焼香をせず後ろに座っている。墓参りは夫の場合、正月や盆に行っているが、I氏の場合は別の機会に行って墓の掃除をする。

一方、I氏の実家の父親は18年前にクリスチャンとして亡くなり、キリスト教式葬儀を行った。そして教会墓地に埋葬された。法事を行わなかったもので、親戚から何もやらないと淋しいといわれ、記念会（教会や信者の家で故人を記念するキリスト教式集会）を2回行った。そして毎年教会で昇天者記念礼拝（教会で故人を記念して行う礼拝）や墓前礼拝を行っているので、そこに参加している。父親はキリスト教を信仰して天国へ行ったと信じているので、安心感と喜びがあるという。

仏式の葬式には避けられる場合は参列しないようにしている。参列した場合は焼香をせず、キリスト教の神に祈りをする。

〈事例10 J氏（女性，71歳，信仰歴約71年）〉

2003年、信仰心の大変厚かった母親が亡くなり、三島市の葬儀社に依頼してキリスト教式葬儀を行った。知り合いや親戚が多かったため、教会ではなく広い葬儀社の式場を借りたのである。葬儀の際は教会員ばかりではなく、隣組でも火葬場で昼食を準備してくれるなどいろいろと手伝って

くれた。

母親は生前分骨を願っていたので、家の墓と教会の墓に分骨した。家の墓は市内の霊園にあるが、納骨する際に牧師を呼んで納骨式を行った。

家の墓には時を決めず、行きたい時に花を持って行っている。しかし2002年から教会に通い始めた夫は盆や、彼岸などに合わせて墓参りをしている。

仏式の葬式や法事では、祭壇の前に出ることさえしなかったが、今は前に出ている。しかし焼香はせずキリスト教の神に祈りをする。

2. 静岡市の事例

〈事例1 K氏（男性、67歳、信仰歴約45年）〉

K氏の家は本家であるが、K氏は6人兄弟の4番目なので、一番上の兄が家の墓を管理している。キリスト教信者になってから墓参りをあまりしなくなった。また兄の家に仏壇があるが、仏壇を拝まなくなった。ただし、両親の法事には参加する。前は法事に参加しても焼香をしなかったが、4,5年前からは焼香をするようになった。それは周りの人たちへの配慮によるものだという。家には両親の写真が置かれており、写真に向かって語りかけることがある。

K氏にとって仏式の葬式への参列が一番の悩み事である。法事と同様、前は仏式の葬式に参列しても焼香をせず、ただ黙祷をした。そしてある時は教会で献花をするようにと話し合って決めたので、献花をしたこともある。しかし4,5年前からは焼香をするようになった。非信者が教会の行事に参加してキリスト教式のやり方に従っていたのを見て、K氏も周りの人々への思いやりがあるべきではないかと思うようになったからである。

葬式で合掌をする場合は、心の中で故人への感謝の気持ちを表す。組合の葬儀の場合は焼香が避けられるような外での手伝いをしようとするが、

それができない場合は焼香をする。清めの塩はもらうと捨てる。

〈事例2 L氏（女性，69歳，信仰歴約69年）〉

L氏は3代目のクリスチャンであるが、洗礼は27歳の時に受けた。L氏の母もクリスチャンであったが、母は仏教を信仰する家の長女だったので、家には母の両親を供養する仏壇が置いてあった。母は親戚に対する義理のために立派な仏壇を購入した。普段は仏壇の世話をしなかったが、年忌には祖先供養を行った。L氏はクリスチャンホームに仏壇があるのはおかしいと思っていたが、なかなか処分することはできなかった。しかし今から33年前に引越しをすることとなり、年忌もある程度済んでいたのので、思い切って仏壇と位牌を処分することにした。仏壇を壊して位牌とともにごみとして出したのである。

L氏の父親は今から25年前に、母親は5年前に亡くなった。二人ともキリスト教式葬儀を行った。町の組合には最初から協力を頼まず、準備から後片付けまで教会員に手伝ってもらった。しかし出棺の際は近所の人々が見送ってくれた。その時、葬儀社で死者への供養として子どもたちに菓子を配った。火葬後、父親の遺骨は3カ月ほど、母親の遺骨は1カ月ほど家の居間に置き、遺骨の前には写真と花を飾っておいた。この期間L氏は朝起きて両親の遺骨に向かって語りかけることが頻繁にあった。参列者のためには献花ができるように参列者用の花も用意しておいた。

墓はL氏の両親が生前静岡市内の共同墓地を購入しておいたので、そこに二人を埋葬した。墓にはイースター記念礼拝後に行くことが多い。兄弟たちと花を持って行って、花を変えたり、墓の掃除をしたりする。L氏は両親が天国にいるから、墓は意味がないと語った。両親が自分たちを見守ってくれているとも思わないという。

しかしL氏は仏式の葬式に参列することは今でも悩み事であるという。一応焼香はするが、死者を拝むのではなく、死者への礼を表すだけである

という。清めの塩はもらうと捨てる。

〈事例3 M氏（女性、81歳、信仰歴約50年）〉

M氏は夫のギャンブルや浮気などで自殺を考えるほど苦しんでいたが、50年ほど前にクリスチャンの友達に誘われ、聖書を学んで心がいやされ、それからキリスト教を篤く信仰してきた。

教会に通うことを反対していた夫も今から10年前にはクリスチャンとなり、7年前に亡くなった。毎月1回M氏の家で家庭集会が開かれたが、そこに夫が参加していくうちにキリスト教を信仰するようになった。夫は3年間の短い信仰生活を送っただけで亡くなったが、その間墓地を移転し、仏壇を処分した。墓は夫の実家の近くにある山にあったが、遠くて墓参りに行くのが難しくなり、墓の移転を決心した。親戚からは静岡に住んでいるから静岡の墓に移転するように言われたが、M氏夫妻は教会墓地の方がいいと思い、藤枝にある教会墓地に移転した。静岡に出ていたし、本家の人たちも菩提寺に話をしてくれたので、菩提寺からの反対はなく、寺に一定のお金を納めただけでスムーズに改葬することができた。改葬に当たっては、藤枝の石碑屋が骨を掘り出すことから、骨を砕いて骨壺に入れることや、山にあった石碑の処分まで一切のことを行った。夫の両親を含め、5柱の遺骨があったが、それぞれの骨壺にいれ、教会墓地にすべて埋葬した。夫の母親を除く4人はキリスト教信者ではなかったが、教会墓地への埋葬の際には牧師が来て祈りをしてくれた。そして教会墓地の石碑にも5人の名前を刻んでもらい、M氏は申し訳ないと思いながらも、大変嬉しかったという。

その後家にあった仏壇も処分した。三島のある集会で仏壇を処分した信者の話を聞き、決心するようになった。夫と話し合った結果、仏壇は壊してごみとして出し、位牌は菩提寺に預けることにした。仏壇があった頃は夫が仏壇の世話をしていた。夫は正月や盆には花や団子を供え、彼岸には

牡丹餅を供えたりと、心を込めて供養していた。仏に供物をあげないと息子に悪いことが起こると信じていたからである。しかしキリスト教信者になってから夫は仏壇の処分に快く協力したのである。

仏式の葬式に参列した場合はM氏は焼香をしない。ただ、前に出て下を向いて悲しんでいる遺族に慰めがあるようにと祈りをする。

〈事例4 N氏（女性、68歳、信仰歴約50年）〉

友達の誘いなどがあり、18歳の時、クリスチャンとなった。夫は2代目のクリスチャンであり、夫の父親は現在N氏が通っている教会を建てたほど熱心な信者であった。

N氏は結婚してから実家にある仏壇を拝まなくなった。仏式の葬儀に参列しても焼香をせず、遺族に平安が与えられるように祈りをする。そして町内の祭りへの参加や神社への寄付なども辞退している。

夫の父親は38年前に、母親は20年前に亡くなったが、二人ともキリスト教式葬儀を行った。市営共同墓地にある両親の墓には命日と彼岸に行っているが、ただ感謝の気持ちで黙祷をする。両親の死後個人的な記念会は設けず、毎年イースターに教会で行う記念礼拝で故人を記念する。

N氏は生きている時によくしてあげることが大事で、死んでから供養することは意味がないと思うと語った。

〈事例5 O氏（男性、84歳、信仰歴約67年）〉

O氏はキリスト教系の中学校に通い、毎日礼拝に参加していくうちにキリスト教を信仰するようになった。その後、20歳の時に日中戦争に参戦して、死を身近なものとして感じるようになり、信仰により目覚めるようになった。

結核療養所で出会った妻はクリスチャンではなかったが、3年前妻が亡くなる6日前に昏睡状態の中で洗礼を受けるようになった。そしてキリ

スト教式葬儀を行った。組合にはお願いをせず、教会の婦人会に葬儀の手伝いを頼んだ。出棺の際には組合の人たちに見送られ、教会で前夜式、告別式を行った。火葬後遺骨を家に持ち帰り、床の間に数日間置いた。遺骨の前には写真と花を飾っておいた。弔問に訪れたある親戚には「線香はないの」と聞かれ、「ない」と答えた。すると「することないね」と言われた。自ら線香を携えてきて焚いてあげた親戚もいた。

その後、教会の敷地内にある納骨堂に遺骨を納めた。毎月の最後の日曜日には召天者記念式が教会で行われ、礼拝後納骨堂に入ることができる。納骨堂には生年月日や死亡日、名前が刻まれた金属製の十字架がそれぞれの遺骨の前に置いてある。この金属製の十字架はO氏の自宅にも妻の写真の前に花と一緒に置いている。O氏は毎日亡くなった妻に日常のことを報告したり、語りかけたりする。日曜礼拝の後も納骨堂に向かって「どうだ」と尋ねることがある。O氏は教会に納骨堂があるので、安心感があるという。

O氏は次男であり、先祖代々の墓は兄の長男が管理している。年に1回ほど花をもって墓参りに行く。仏式の葬式に参列した場合は焼香を行う。

〈事例6 P氏（男性、74歳、信仰歴約40年）〉

小学5年の時に実母が亡くなり死を考えるようになった。そしてキリスト教系の大学に通い、キリスト教に関心を持ったが、その後アメリカ人宣教師との出会いによってクリスチャンとなった。

12年前に父が亡くなったが、非信者であったため仏式で葬儀を行った。そして伊豆にある先祖代々の墓に埋葬した。年に2回彼岸と盆に墓参りをしている。花や線香、お土産を持って墓参りに行き、花や線香を立て合掌をした後、墓の掃除をする。P氏は長男なので、菩提寺にお金を納めることはP氏がするが、実家を離れ静岡に住んでいるので、墓の管理は父

の親戚に頼んでいる。

一方、3年前には継母が亡くなったが、継母は亡くなる3年前に洗礼を受けたので、キリスト教式葬儀を行った。そして継母も家の墓に埋葬するつもりであったが、信者であるP氏の妻や弟、子どもたちが反対し、教会の納骨堂に遺骨を納めた。親戚は夫婦が別々の墓に埋葬されていることに不満を持っている。そのため、P氏は現在静岡市営墓地を購入しようとしている。市営墓地だと宗教に関係ないので、両親と一緒に埋葬することができるからである。でもP氏は実家の墓からの移転に淋しさを感じている。父の霊はどこにもあると思うから墓への執着は強くないが、墓参りの度に親戚と会えたのに、改葬してしまうと親戚との関係が遠のきかねない。それでP氏は改葬を望まないが、妻や弟、子どもたちが希望しているので、市営墓地の購入が決まったら移転するつもりだという。

P氏の家には仏壇があり、両親の生前中は両親がお世話をしたが、両親の死後仏壇はしまったままの状態にある。仏壇の処分については考えていない。

父親のためには法事を行っている。一方、クリスチャンであった継母のためには位牌を作らず、居間に名前と命日をいれた金属製の十字架を置いている。

P氏は仏式の法要に参列した場合は仏式のやり方に、キリスト教式の記念式に参加した場合はキリスト教式のやり方に、神道式の儀礼では神道式のやり方に従って儀式を行う。仏式の葬儀に参列して焼香などもすべて行っている。宗教によって方式は違うが、参列する気持ちは同じであるという。そして宗教によって家族がばらばらになってはいけないと思うという。

〈事例7 Q氏（女性、81歳、信仰歴約58年）〉

Q氏は終戦後精神的に落ち込んでいたが、その時いとこの勧めによって

キリスト教を信仰するようになった。夫もクリスチャンであり、教会で結婚式を挙げ、その後授かった5人の子どもも皆幼児洗礼を受けた。

しかし、キリスト教を信仰していく道程は決して平坦ではなかった。Q氏が40歳になった時に静岡に家を建て、夫の両親と同居することとなった。両親は非信者であったし、厳しかったため、同居を始めてから8年間教会に行けなかった。毎日大家族のための家事に追われる日々を送らなければならなかった。夫の父親の死後ようやく月1回ぐらい教会に行けるようになったが、毎週教会に通えるようになったのは父の死後からさらに10年ほど経ってからのことである。

さらに夫は長男であったため、家には仏壇があった。仏壇の世話は夫の両親がしたが、今から33年前に夫の父が亡くなってからは夫の母が仏壇の世話をした。母は毎朝晩仏壇に線香を立て、ご飯やお茶などをあげていた。週1回花を変え、盆には僧を呼んで読経してもらった。母は仏壇にいる父の霊が自分達を見守ってくれていると思い、心を込めて供養していた。しかし、母の老年は病気で苦しむ日々であった。十数年間一生懸命供養しても病気を治してもらえないことが悔しかったようで、母はとうとう仏壇を閉めてしまった。それから母はQ氏夫妻が信仰する神を拝みたいと言ったので、Q氏がキリスト教について話をしてあげた。それまでは嫁のことを聞き入れなかった姑であったが、素直に嫁の話を聞き入れ、キリスト教を信仰して亡くなった。

葬儀はキリスト教式に行われた。前夜式は家で行い、葬送式は教会で行った。前は葬儀があると組長の家に集まって料理を作ったりしたが、現在は葬儀屋に葬儀に関わるほとんどのことを任せている。組合では受付をするぐらいだった。教会員の手伝もいろいろあった。葬式の後、火葬をして家に遺骨を1カ月ぐらい置いた。遺骨を家に1カ月間も置いたのは葬式に間に合わなかった親戚への配慮によるものであった。納骨の際は牧師が来て祈りをしてくれた。

静岡市営の墓を購入しておいたので、母の遺骨をそこに埋葬した。夫の実家の田んぼに家の墓があったが、遠かったので静岡に墓を移転した。墓を移転した当時は母や親戚がクリスチャンではなかったので、墓をキリスト教式と仏式のどちらにするかについて迷いがあった。でもクリスチャンなのでキリスト教式墓を造りたいと母に申し出たら意外に母が賛成し、後で自分が亡くなったらその墓に入れてくれるようにとお願いをした。檀那寺は最初反対したが、Q氏夫妻が静岡に住んでいるし、永代供養代も払っていたので、それ以上反対することはできず許可した。Q氏はキリスト教式墓が完成した時、大変嬉しかったという。墓石には十字架も刻んだ。

彼岸と盆、暮れ、命日には花をもって墓参りをする。夫の父のためには法要を行っていたが、改葬後は父の命日に母も合わせてキリスト教式の記念式を行っている。父は非信者であったが、Q氏は父が非信者だったからといって心が痛むことはないという。

仏式の葬式に参列した場合は焼香を行うことが多い。今でも仏式の葬式への参加は困り事であるという。また日曜日にある組合の集まりや神社の掃除、祭りへの参加などはクリスチャンとして負担になることであるという。

〈事例 8 R氏（女性、62歳、信仰歴約10年）〉

R氏は10年ほど前にクリスチャンとなった。夫はクリスチャンホームで生まれ育ったが、夫も9年前に洗礼を受けた。

夫の家には仏壇はなく、夫の実家の方の市営墓地にある家の墓もキリスト教式である。夫は次男なので、夫の兄が墓の管理費を払っている。そして実家に残っている四男が実際に墓の管理をしている。家の墓に埋葬されている9人は皆キリスト教信者である。夫も教会墓地ではなく、兵庫県にある家の墓に将来埋葬されたいと希望しているという。でもR氏は教

会に納骨堂がある場合は分骨も考えたいという。なぜなら、墓はそこに参る子孫のことを考慮して決めなければいけないからだという。夫の両親は既に亡くなり、両親が所属していた教会から毎年記念礼拝の案内状が届く。R氏夫妻は今まで2回参加した。参加できない場合には献金を送った。

一方、R氏の実家は仏教を信仰しており、20年ほど前に亡くなった父の葬式は仏式で行った。まだ母が生きているので、母が仏壇の世話をしている。彼岸と盆には僧に読経してもらっている。R氏も実家に帰ると仏壇を拜む。仏壇の前に座って線香を立て、報告をする。しかし、R氏はこれを信仰としてではなく、儀式として受け止めているという。ただし、クリスチャンになってから数珠は捨てるようになった。そして経も読まなくなった。仏式の葬式に参列した場合は焼香をするが、やはりただの儀式として受け止めているので、悩むことはないという。洗礼を受けてからしばらくの間は焼香に対する抵抗感が少しあったが、相手の気持ちを大事にすることも重要だと思い、今は悩まずに焼香をしている。

両家の墓参りに行くと報告をしたり、心の中で故人に語りかけたりする。困ったことがあれば助けを求めることもある。両家の宗教は違うが、墓参りする気持ちは同じであるという。

〈事例9 S氏（女性、76歳、信仰歴約57年）〉

S氏は終戦後精神的な虚しさからの解放を求め、教会に足を踏み入れ、19歳にクリスチャンとなった。夫は2代目のクリスチャンで、信仰心が篤い人であった。5年前に亡くなるまで夫は教会の伝道活動や奉仕活動に大いに携わっていた。

夫の葬儀はキリスト教式に行い、教会の納骨堂に遺骨を納めた。現在、家にはピアノの上に夫の写真と花が飾られている。S氏は亡くなった夫が心の中では生きているかのように思われて、普段夫への語りかけが多いと

いう。

夫の両親が埋葬されている本家の墓への墓参りもしている。親戚に対する思いやりの気持ちで行っている。墓の前では合掌もするが、中身はキリスト教の神への祈りであるという。

他の宗教の葬式に参列した場合は、それぞれの宗教方式に従う。仏式の葬式に呼ばれるのは困り事ではあるが、相手への思いやりの気持ちで参列している。非信者たちも教会で行うキリスト教式葬儀に参列して献花してくれるから、信者たちも違う宗教の葬式に対する配慮があるべきではないかと語った。ただし、S氏の場合、焼香は3度のうち、1度だけで済むことが多い。

〈事例10 T氏（男性、74歳、信仰歴約56年）〉

T氏は戦後同級生の誘いによって教会に行くようになった。その後教会で妻とも出会い、教会で結婚式を挙げた。そして1969年から現在に至るまで教会の役員を務めている。

寺に先祖代々の墓があるが、T氏の兄がその墓を見守っている。両親の法要には出席して焼香などを行う。若い時は焼香の問題で悩んだが、非信者も教会で儀式があると参加してくれるのを見て、T氏も焼香を宗教儀式とは割り切って考えることにした。

お寺に先祖代々の墓があるが、年に2回彼岸に墓参りをしている。花を持って安らかに眠るように祈りをしたり、報告をしたりする。墓に葬られている8人は皆クリスチャンではなかったが、そのことで心が痛むことはないという。亡くなった両親のために家に何かを飾ったりすることもない。

III 仏 壇

真言宗寺院の住職であった三浦秀有は仏壇の流れを次の三つに分けてい

る〔三浦 1980: 188〕。第一は中世、土豪・武士階層の守護仏信仰や持仏堂の流れを汲むものであり、第二は鎌倉以後の仏教、とくに浄土真宗および日蓮宗などにおいて、仏壇をとくに重視する家の信仰に根ざすものであり、第三は単に位牌の置き場所として始まった場合である。

持仏堂成立の契機となるのは、『日本書紀』天武天皇十四年(685)三月二十七日の詔であり、そこには「諸國に、家毎に、佛舎を作りて、乃ち佛像及び經を置きて、禮拜供養せよ」と記されている〔坂本他 1994: 468〕。ここで「佛舎」が仏壇の起源といわれているが、これは諸国の国司や役人、あるいは富裕な階級に、邸内に持仏堂を建てるよう勧めたもので、直ちにこれを在家の仏壇と同一視することはできない〔五来 1994: 197〕。しかしこのような公的な持仏堂は私的な持仏堂へと広がり、持仏堂はやがて仏間として家屋の一間を占め、これが仏壇として普及する〔五来 1981: 99〕。

しかし、仏壇の流れの中で主流をなしてきたのは、上記の三つの中で第三の位牌の置き場所としての仏壇の役割であろう。仏教化した形では位牌の置き場所といえるが、位牌というのはそもそも祖霊の依代なので、仏壇は先祖の霊を迎えて祭る祭壇ということになる。形は祠であったり、裏側の部屋の押入れや戸棚の一部であったりしたが、やがては箱型の「厨子」へと発展し、これが今日の仏像や位牌、及びこれに伴う荘厳具を安置する厨子型仏壇になった〔塩入 2002: 114〕。筆者の調査でも仏壇の機能は、位牌の置き場所としての性格が強いことが明らかになり、祖先祭祀の拠点として把握している。

しかし、キリスト教では唯一神信仰を掲げており、祖先祭祀を偶像崇拜としてみなしている。そのため、キリスト教信者は祖先を篤く祭る在来文化と唯一神信仰の狭間で葛藤せざるを得なくなる。三島市と静岡市におけるキリスト教信者の仏壇への現実の対応は表3のとおりである。

筆者の調査では20の事例の中、4つの場合が仏壇を保持している。仏

表3 三島市と静岡市におけるキリスト教信者の仏壇への対応

仏壇への対応	三島市の事例	静岡市の事例
①仏壇を保持して供養している.	1	
②仏壇を保持しているが、供養はしていない.	5	6, 7
③他の兄弟に仏壇と位牌をあげた*.		
④仏壇は処分したが、位牌は持っている.	3	
⑤仏壇は処分したが、位牌は預けた.	9	3
⑥仏壇と位牌を処分（焼却など）した.	6, 7	2
⑦仏壇はないが、故人の写真や記念物、花のどちらかを飾っている.	3, 4, 8, 10	1, 5, 6, 9
⑧何もない.		4, 8, 10

*: 第2節で挙げた事例の中では③と直接結びつく事例はなかったが、本稿で取り上げていない事例などを参考にして一つの対応として示している。

壇を処分したケースは6つある。ただし、位牌の処分が仏壇の処分より遅れるか、あるいは位牌だけの保有というケースも見られる。位牌は元来儒教で始められ、それが仏教などにも受容された。日本では現在のような位牌は室町時代の14世紀に起こり、16世紀末には庶民層にも広まり、さらに江戸時代に入って各地に普及した〔竹田 1995: 19〕。位牌は祖霊の依代として大事にされるようになり、キリスト教信者にもこのような意識がうかがわれる。

「宗教と社会」学会の1999年の宗教意識調査によると、プロテスタント信者の中で仏壇を祀っている比率は23.1%である¹⁾。西山茂が1971年に千葉県下福田村で行った調査では、キリスト教世帯の中で仏壇を保持している比率は28.6%である〔西山 1975: 67〕。川又俊則の1991年の調査によると、東京の大森めぐみ教会では調査した教会員のうち、神棚は8%の世帯で保持しているのに対し、仏壇は32%の世帯で保持していた

¹⁾ <http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/pub-jap.files/pa00-re&e.htm>.

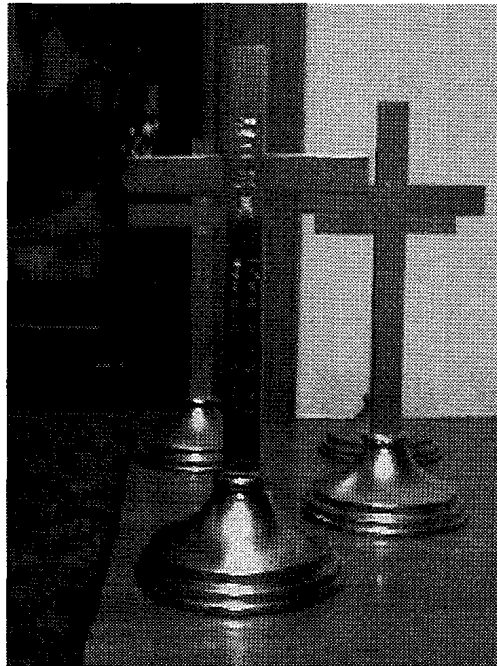


写真2 故人の死亡日や名前が刻まれている十字架

[川又1994:10]。仏壇を保持している理由として、故人が仏壇を大切に扱っていたことや故人を記念するために、仏教徒の親族のためにといったことを挙げている。日本の信者の生活から寺院・神社はもちろん神棚・屋敷神も脱落しやすいのに、仏壇と祖先祭祀は容易に姿を失わないということは何人かの研究者によって指摘された点である²⁾。

一方、⑦「仏壇はないが、故人の写真や記念物、花のどちらかを飾っている。」という対応も三島市と静岡市に共通して多く見られる。伝統的な仏壇の代わりに、故人を記念する思い出の物や、写真、花などを飾っている。静岡市の場合は故人の名前や生年月日、死亡日を刻んだ金属製の十字架（写真2）を写真とともに飾る場合がいくつかあった。三島市の場合は

²⁾ キリスト教信者の生活から神棚より仏壇が消えないということは、森岡清美、川又俊則、西山茂、磯岡哲也の調査結果によって明らかになった。森岡清美はその理由を、神棚を通して祭られる年中行事の世俗化と、日本の文化中枢あるいは中心的価値を構成するものが祖先祭祀を根幹とする家の神祭祀であることに起因すると述べている [森岡 1968: 232]。

写真や花を飾ることが多い。

西山茂が千葉県下福田村で行った調査では、仏壇の代替物は38.1%が設けていた〔西山 1975: 67〕。ここで「代替物」とは、厨子のない先祖を敬う場所のことで、そこには一般に十字架、逝去者の写真・花瓶・香炉などが置かれている。また東京都大田区池上にある大森めぐみ教会では故人の写真や十字架、思い出の品、稀に位牌も飾った「記念コーナー」を設けている信者は31%であった〔川又 1994: 10〕。福島市の信夫教会では牧師が高さ20センチメートルほどの木製の十字架を渡している〔川又, 1998〕。この十字架には故人の名前と逝去日が書かれており、遺族はこれを居間の棚の上などに故人の写真と一緒に飾る。

観念的な側面では、伝統文化をより引きずっている。写真を見ながら、または故人を思い浮かべながら故人に語りかけたり、困ったことがあれば故人に助けを求めたりする場合が多い。これは日本では江戸時代から仏壇が置いてあり、仏壇に向かって毎日拝んでいた慣習がキリスト教信者にも残っているからだと考えられる。また仏教の影響によって、先祖が祟りをもたらす存在というよりは、仏として子孫を見守ってくれる守護神としての性格が強められ、三島市と静岡市におけるキリスト教信者にもこのような祖先観の影響が及んでいることと思われる。

IV 焼 香

焼香は良い香りを以て供養することである。曹洞宗教団の説明では、インドは暑い国で臭気が多く、また熱帯地方の植物には良い香りをする植物も多いので、昔から香は用いられていた。それが釈尊の父、浄飯王の葬儀や、釈尊の葬儀に香が大いに用いられることにより、香の供養が仏教徒の葬儀に欠かせないものとなったとされている。そして釈尊は香を好むから、香を焚くとその香りに感応して降臨したという故事が伝わり、仏教徒が香を焚くようになった〔曹洞宗静岡県第一宗務所編 2005: 150-153〕。

日本のキリスト教信者の死者儀礼への対応

やがて日本にも香木が伝来し、日本の仏教徒も仏の供養のために香を葬儀や儀式の中で盛んに用いるようになった。香の用い方はいろいろあるが、日本の葬儀では焼香が代表的であり、死者を供養する象徴的な行為として受け止められている。

日本消費者協会の1992年の統計によると、日本では仏式の葬儀が93.8%、神式の葬儀が4.2%、キリスト教式葬儀が1%の割合で行われているという。葬儀の9割以上が仏式で行われるので、キリスト教信者は仏式の葬儀や法事に出席しなければならない場合が多く、その際様々な問題に遭遇する。三島の事例4のD氏が焼香の問題が一番の悩みだと言ったように、キリスト教信者にとって焼香が日常生活でぶつかる最も難しい問題であるかもしれない。

次の表4は三島市と静岡市におけるキリスト教信者の焼香への現実の対応をまとめたものである。

表4に示されているとおり、筆者の調査ではキリスト教信者が仏式の葬式に参列して焼香をするというのが半数を超えている。焼香をする理由

表4 三島市と静岡市におけるキリスト教信者の焼香への対応

焼香への対応	その理由	三島市の事例	静岡市の事例
みんなと同じく焼香をする	①信仰と切り離して、ただの儀式として受け止める	2, 3	6, 8, 10
	②人々への配慮		1, 5, 7, 9
焼香はするが、死者を拝まない	儀式の形式にだけ従う	4	2
焼香の代わりに献花をする	教会で話し合って決めた		1
焼香をせず、キリスト教の神に祈りをする	信仰を優先	6, 7, 8, 10	3, 4
焼香の場には可能な限り避ける	異教式の拒否	9	

としては、先ず焼香を信仰と切り離して、ただの儀式として受け止めるからである。実際に三島のある教会では焼香の問題について議論があったが、焼香を宗教的行為としてではなく、一つの習俗としてみなすことにしたという。

川又俊則も調査の結果、生きている間の信仰と死の問題とを別に考えるキリスト教信者が少なくないことを指摘している [川又 2001: 197]。戦後 50 年の日本人の宗教意識と宗教行動を調査した石井研士は、日本人には意識レベルでの無宗教（漠然とした無宗教という意識）と行動レベルでの宗教（初詣、お盆、七五三などの宗教行動）とのギャップが存在すると指摘している [石井 2002: 57-69]。そこにはキリスト教などの既存の制度化された宗教団体を宗教ととらえ、年中行事や伝統儀礼を習俗や慣習として区別する宗教観が反映しており、芦名定道はこうした宗教観の背景として、戦国時代末期から江戸時代に確立した政治権力の宗教政策（檀家制度）と、明治時代に展開された「神道＝非宗教」論などの影響が存在していると指摘する [金・芦名 2004: 9-10]。

キリスト教信者が焼香をする二番目の理由は、周りの人々への配慮によることである。これには自己主張の度合いが弱く、人々との関係を重んじる文化的要因が働いていると思われる。またキリスト教信仰が諸国に比べて個人的・私的なものになっているという日本キリスト教の性格が表れていることでもあると考えられる [古屋・大木 1997: 218]。

日本ではキリスト教信者がマイノリティーであり、葬式や法事については仏教が深く関わり、浸透しているため、キリスト教信者が信仰に基づく自覚的な行動を取るのが難しい状況である。そのため、思いやりや義理、人間関係を優先に思いがちである。

一方、焼香を死者を拝む行為として受け止めているキリスト教信者の中では仏式の葬式や法事の場合において焼香をせず、キリスト教の神に祈りをしたりして信仰表明を明らかにする人たちがいる。これは決して易しいこ

とではないが、焼香を信仰の問題として真摯に受け止め、キリスト教信仰を優先させている場合である。静岡のある教会では、仏式の葬式に参列した時でも献花をした方がいいと決め、静岡の事例1のK氏は仏式の葬式に花を用意して参加し、献花をしたことがあるという。しかし、仏式の葬式で献花をするというのは稀な事例であって、実際には焼香の代わりに祈りをするという形が一番多い。他に、焼香の場に居合わせないように心掛けて信者もいる。

V 墓

墓はただ死骸を葬る場所ではなく、墓参りを通じて行われる先祖崇拜の場であり、家族を糾合し、その一員としての自己のアイデンティティを確認する自己の集団帰属の根拠ともなる。例えば、墓石には家紋や、家印が彫られていることがあるが、これは墓石が個人よりも、家を象徴するものであることを示すものであろう³⁾。

日本における墓は家の宗教的施設として機能するだけでなく、菩提寺との関係を持続させる機能も持っている。墓を守るためにできた菩提寺は日本の仏教寺院の9割以上を占めている[五来 1981: 142]。そのためキリスト教信者にとって墓地の問題も大変難しい問題の一つである。

墓地問題をめぐる日本のキリスト教信者の苦悩を表すものとして、家の墓地と教会墓地への分骨という大変日本的な現象が見られる。三島の事例5のE氏は母親を家の墓と教会の墓に分骨したばかりではなく、E氏本人も分骨を願うと語った。事例10のJ氏の母親も信仰心が大変厚かったが、彼女は生前分骨を願っていたので家の墓と教会墓地に分骨された。また三島西キリスト教会の牧師の話によると、20年ほど前にある信者のキリスト教式葬儀が行われた。しかし、その息子は彼の父親の遺骨を分骨し

³⁾ 家紋は同じ姓の家に共通である場合が多いが、家印は家ごとに異なっている[静岡県編 1989: 228]。

て小さい壺の方は教会墓地に埋め、大きい壺は寺の墓に納めた。寺に納骨する際は仏教式葬儀にし直した。それから2004年、教会墓地に収骨してある父親のお骨を戻してほしいと頼み、その遺骨を持ち帰り、それも寺の墓に納めたという。静岡の事例では分骨が見当たらなかったが、事例8のR氏は分骨も考えたいといった。

川又俊則が1994年から1997年にかけて東北地方の日本基督教団所属教会の教会墓地を調査した結果を見ると⁴⁾、奥羽教区A地区のO教会では分骨が10柱、全骨が1柱埋蔵されている。また奥羽教区N地区のT教会では9名が教会の納骨堂と家族の墓に分骨されている。そして福島市の信夫教会の場合は教会の納骨堂は遺骨の一時預かりとしての利用が多く、各々の家族が自らの墓地を建設するまで預けておき、それが完成すると引き取っていった。37年間に26柱の遺骨が収蔵されたが、1997年8月現在で収蔵されている遺骨は10柱であった。それ以外は自らの墓地へと改葬された。これらの調査の結果として川又俊則は次のようなことを指摘する。「キリスト教指導者のみならず信徒たちも教会が独自の墓地を持つことには賛成する。だが、信徒たちがそれを利用するとは限らない。それは、信徒たちが墓地を自らの信仰の証という観点ではなく、個々の家族で保持・継承する宗教的施設だとの認識を持つからである。」⁵⁾

三島市と静岡市における教会の場合は、一時預かりとしての教会墓地の利用は福島市の信夫教会より少ない。三島市で最も早く建てられた三島教会の場合は、1982年に教会の敷地内に納骨堂(写真3)が建造され、2004年4月に至るまで59柱の遺骨が収蔵されている。しかし牧師に問い合わせてみたところ、遺骨の一時預かりはないということであった。三島高台キリスト教会の場合も1991年から教会墓地(写真4)に教会員の

⁴⁾ 川又俊則「キリスト教信徒における死者儀礼の問題—教会墓地を中心に」成城大学民俗学研究所研究例会(1997.12.4)での発表原稿。http://www.toshi-k.net/402.htm.

⁵⁾ http://www.toshi-k.net/402.htm.

日本のキリスト教信者の死者儀礼への対応

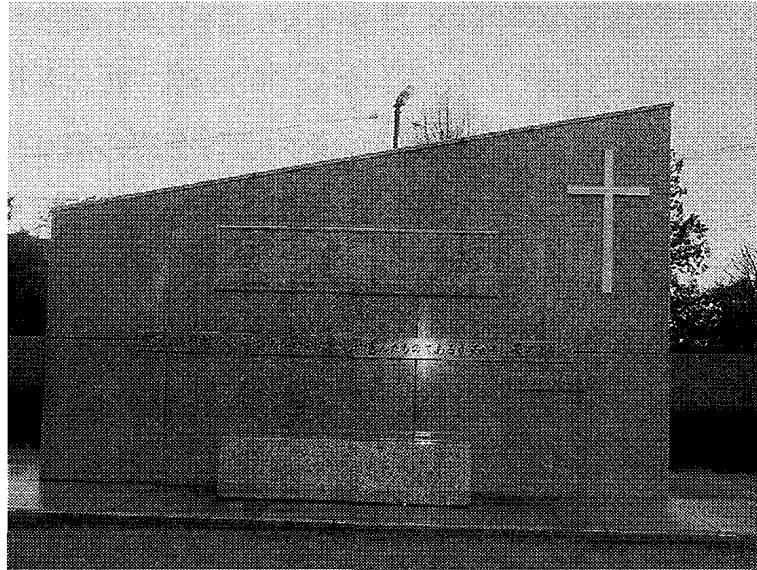


写真3 三島教会の納骨堂



写真4 三島高台キリスト教会の教会墓地

遺骨が収蔵され、2004年までは10柱埋葬されているが、一時預かりはないという。ただし、三島西キリスト教会の場合は13柱の遺骨が収蔵されている中、一時預かりは半分近くであるという。静岡教会（写真5）の場合は、墓のない遺骨を一定期間預かったことはある。そして静岡の事例6の場合は、家の墓を新たに造る予定であるが、その際は教会の納骨堂に



写真5 静岡教会の納骨堂

納めた母親の遺骨を家の墓に改葬するつもりであるという。

教会墓地への改葬に当たっては、家の墓に埋葬されている非信者を含めた家族全員の遺骨を改葬する場合が多い。ここでも家制度と深く結びついている墓の機能を窺うことができる。三島の事例6の場合は両親がキリスト教信者ではなかったが、死産した次男を含め、3人を教会墓地に改葬した。しかし、教会墓地の石碑に名前を刻んでもらうことはできず、教会墓地の石碑には教会員だった7人の名前だけが刻まれている。静岡の事例3の場合は、教会墓地に改葬した5柱の遺骨の中、4柱が非信者であった。三島めぐみチャーチの場合は1982年から教会墓地に教会員が埋葬され、2004年4月まで30柱の遺骨が収蔵されている。しかし30柱の中で教会員は12柱だけで、残りは非信者であった家族の遺骨である。三島西キリスト教会の場合は1柱が非信者の遺骨である。静岡梅屋町キリスト教会の場合は13柱の中、4柱が非信者の遺骨であるという。

これらを見ると、キリスト教信者の間でも墓地はそれぞれの家族で保持・継承すべき施設という規範が働いていることが分かる。三島の事例1と3は家の墓に、事例4は先祖代々の墓に親を埋葬した。事例5と10は家の墓と教会墓地に分骨をした。事例2の場合は寺院が管理する家の墓への埋葬を希望したが、一人暮らしをする人は寺院で受け入れてくれないため、教会墓地へ改葬した。事例6はキリスト教信者になってから寺へ行けなくなり、教会墓地に墓を移転した場合である。これは信仰上の問題で積極的に教会墓地へ改葬した場合といえる。事例8と9は夫の親は先祖代々の墓に埋葬されており、実家の親は教会墓地に埋葬されている場合である。事例7は家の墓を持っておらず、教会墓地を購入した場合である。

静岡の場合は、事例2, 4, 7, 8のように市営共同墓地に家の墓を造成している場合が多い。静岡市には戦前から公営墓地があったので、仏教寺院の墓を利用せざるを得なかった三島市より墓をめぐる葛藤が少なかった。そして市営墓地を利用しているクリスチャンが多いという特徴が見られる。静岡市の事例の中では事例3だけが家の墓を教会墓地に移転した場合であり、事例5のO氏は次男なので、事例9のS氏の夫は末っ子なので教会の納骨堂を新たな家族の墓として利用している。

このように、自ら墓地を持っている者が積極的に教会墓地へ埋葬するという事例は少なく、新たに家の墓を造る際に教会墓地を利用する。しかし、その時も継承者との信仰の違いを考慮して、無宗教的な霊園や市営墓地の区画を保持する傾向にある。先祖代々の墓や家族の墓がある場合は、キリスト教信仰の証として教会墓地と家の墓に分骨するか、あるいは家の墓を優先する。

三島市と静岡市の教会墓地は安いし、教会で管理してくれるので安心できる。しかし30～50年ほど経つと遺灰を土に返すことや、年寄りにとって納骨堂や共同墓地は抵抗感を与えるものであるので、心理的違和感が生

じて利用されないことがある。また埋葬されている親が淋しがるかも知れないので、親だけを家の墓に残して、自分だけが教会墓地に葬られることはできないという理由を述べる者もいる。

墓への対応はキリスト教信者のアイデンティティーの問題とも結びつくと思われる。これまで墓参りや祖先祭祀を中心に家族・親族関係が形成され、先祖との関係や家族・親族との関わりの中で自己のアイデンティティーを確立してきたといえるが、教会墓地を利用するに当たっては新たな人間関係や価値を模索せねばならない。教会側は教会墓地にいかなるキリスト教的な意味づけができるか、また教会墓地を利用する信者たちにどのような帰属感を与えうるかが今後の課題であるといえよう。

おわりに

本稿では仏壇は祖先祭祀の拠点として、焼香は死者供養として、墓は自己の集団帰属の根拠としての意味に焦点をあて、三島市と静岡市におけるキリスト教信者の仏壇や、焼香、墓への対応と意思について事例を通して探ってきた。仏壇への対応としては仏壇代替物を置いている場合が多く、祖先祭祀との融合が図られている傾向が見られる。焼香については焼香を死者供養としてみなすべきか、あるいはただの習俗としてみなすべきかが教会の中で十分議論されておらず、信者たちの判断に委ねられている側面がある。教会墓地は墓を必要とする信者たちに利用される場合が多く、信仰の証としての利用はまだ少ないというのが現状である。

三島市や静岡市の事例を見ても分かるように、キリスト教信者の死者儀礼への対応は多様である。これには様々な理由が挙げられるが、第一には死者儀礼は日本社会における宗教的心意の根幹を形成してきており、未だ堅い土壌を保っているからだと思われる。実際にマジョリティな仏式の葬式の場合においてマイノリティであるキリスト教信者は焼香などに対してかなり心理的負担感を懐いている。第二には信仰心が旺盛で日本社会にア

クティブに働きかけていた初期の信者に比べ、現在はキリスト教的観念の貫徹が弱められているからだと考えられる。第三には教会側が死者儀礼へ積極的に関わってこなかったことも一因であると考えられる。教会には慶弔に関する規定はあるが、信仰の問題ともっとも関わりのある仏壇や、焼香、墓の問題については具体的な方針がない。

芦名定道は聖書におけるイエスの家族批判は、ただの家族の無意味化や否定に終わっているのではなく、むしろ意味転換を経た家族の肯定に至っているという [芦名 2003: 4]。つまり、批判（否定）→転換→拡張（肯定）というプロセスを経て、血のきずなを基盤とする自然的関係から神のみこころを行う者が家族であるという新たな関係へ移行するという。

この家族をめぐる聖書的な一連のプロセスから見ると、日本のキリスト教は死者儀礼に対して批判（否定）の過程を乗り切っていないのではないかとと思われる。日本のプロテスタントは日本に移入される時、自己をプロテスタントとは全く異質的なものとして邪宗視する日本固有の思想と必然的に対決しなければならなかったが、それは解決をみないまま外交的圧力により黙認となった [大内 1952: 89]。この状況が現在まで続き、キリスト教は日本社会から浮き上がって日本文化の一線から一步後退しているように見える。日本のキリスト教は、死者儀礼や習俗に真摯に向かい合い、自覚的信仰による批判、肯定の過程を経なければ、日本文化に根づいたキリスト教文化の形成からは遠のいてしまうのではないかと考える。

ただし、キリスト教が日本文化に根を下ろしていくためには、多宗教が重層的に絡み合っている日本の宗教状況を理解する必要がある、これらの在来文化に対する共感と柔軟な態度を持つべきであろう。なぜなら多元的宗教文化の中で形成されてきた慣習や、価値観、意識などを全面的に否定してしまうと、アイデンティティーの解体の危機に直面するかもしれないからである。しかし、キリスト教の本質、特に唯一神信仰を歪める文化要素に対してまで寛容になってしまうと、キリスト教は質的な変容を余儀な

くされる。したがって、もしキリスト教的死者儀礼が確立されるとすれば、伝統的死者儀礼への深い理解に立ちながらも、常にキリスト教の本質に照らし合わせる必要があり、崩れつつある家や共同体の新たな再建に可能性を提示できるものでなければならないであろう。

参 照 文 献

- 芦名定道 2003「東アジアの宗教状況とキリスト教一家族という視点から」『アジア・キリスト教・多元性』現代キリスト教思想研究会。
- 石井研士 2002『データブック現代日本人の宗教—戦後五〇年の宗教意識と宗教行動』新曜社。
- 磯岡哲也 1999『宗教的信念体系の伝播と変容』学文社。
- HALL, Edward T. 1959 (1967) *The Silent Language*. Greenwich, Conn.: Fawcett Publications. (『沈黙のことば』国弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳：南雲堂)
- 大内三郎 1952「日本におけるプロテスタンティズムの移入」『東洋文化』10号，東洋大学東洋文化研究所。
- 大濱徹也 1987「キリスト教会にみる死者供養」『真理と創造』17巻1号，中央学術研究所。
- 小和田哲男編 2000『不思議事典』新人物往来社。
- 川又俊則 1994「死者儀礼のキリスト教的意味付け—大森めぐみ教会の事例より」『常民文化』17号，成城大学常民文化研究会。
- 1995「キリスト者の先祖祭祀への対応」『常民文化』18号，成城大学常民文化研究会。
- 2001「キリスト教会の日本社会への適応—東北・関東地方の教会墓地を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第91集。
- 金文吉・芦名定道 2004「死者儀礼から見た宗教的多元性—日本と韓国におけるキリスト教の比較より」『人文知の新たな総合に向けて』，京都大学大学院文学研究科。
- 五来 重 1981『仏教と民俗』角川書店。
- 1994『日本人の死生観』角川書店。
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 1994『日本書紀』下巻，岩波書店。
- 塩入亮乗 2002「仏壇と仏具」『大法輪』第69巻8号，大法輪閣。
- 静岡教会創立百周年記念実行委員会 1974『深町正勝説教集：弱い時にこそ強い』

日本のキリスト教信者の死者儀礼への対応

- 日本基督教団静岡教会.
- 静岡県編 1989『静岡県史 資料編 23』(民俗一) 静岡県.
- 1993『静岡県史 資料編 24』(民俗二) 静岡県.
- 静岡県総務部学事課 1994『静岡県宗教法人名簿』静岡県総務部学事課.
- 曹洞宗静岡県第一宗務所編 2005『曹洞宗 葬儀・法事のしきたりとその由来』曹洞宗静岡県第一宗務所.
- 総務部広報公聴課 2003『ざ・みしま』静岡県三島市.
- 竹田 旦 1995『祖先崇拜の比較民俗学』吉川弘文館.
- デヴィッド・リード 1989「日本のキリスト教信者の祖先関係」『神學』51号, 東京神學大學神學會.
- 長倉 勉 1998『黎明期の三島教会—その歴史と伝道』日本基督教団三島教会.
- 西山 茂 1975「日本村落における基督教の定着と変容—千葉県下総福田聖公会の事例」『社会学評論』26巻1号, 日本社会学会.
- 沼津市明治資料館 1997『神に仕えたサムライたち—静岡移住旧幕臣とキリスト教—』沼津市明治資料館.
- 古屋安雄・大木英夫 1997『日本の神学』ヨルダン社.
- MULLINS, Mark R. 1998 (2005) *Christianity made in Japan: a study of indigenous movements*. University of Hawaii Press. (『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎 恵 (訳): トランスビュー)
- 待井芙美子 2000「日本のキリスト教会における死者への対応」『宗教と社会』6号, 「宗教と社会」学会.
- 三浦秀宥 1980「仏壇と位牌」五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登編『講座・日本民俗宗教 2: 仏教民俗学』弘文堂.
- 三島市誌編纂委員会 1959『三島市誌』下巻, 三島市.
- 森岡清美 1984『家の変貌と先祖の祭』日本基督教団出版局.
- 1968「日本農村における基督教の受容」明治史料研究連絡会編『明治史研究叢書 X: 近代思想の形成』御茶の水書房.
- 若林淳之 1988『静岡県風土記』旺文社.